

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	ある「民族資産階級」と上海の社会主義改造（1949～1965）
Author(s)	水羽, 信男
Citation	アジア社会文化研究 , 24 : 1 - 27
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/53968">10.15027/53968</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/53968">https://doi.org/10.15027/53968</a>
Right	
Relation	



## 論説

# ある「民族資産階級」と 上海の社会主義改造（1949～1965）

水羽 信男

## はじめに

「民族資産階級」という史料用語は、誰が「民族」的かという判断を共産党が一方的に下すがゆえに、極めて恣意的な政治用語であり、学問的な議論には馴染まない点がある（以下、「」は省略）。しかし 20 世紀前半の中国における資本主義は 1930 年代以降、相応の発展を遂げるとともに<sup>1</sup>、大企業から中小企業まで中国人商工業者のなかに、容共的な人びとが一定程度存在したことは、まぎれもない事実であった。1945 年 12 月に重慶で組織された中国民主建国会（民建）は、民族資本家の一部と中国民主同盟と距離をおいた知識人によって組織された団体といわれ、1949 年の中華人民共和国の設立に関与し、現在まで存続している<sup>2</sup>。

中国人商工業者の容共的な人々は、共産党にとって「革命」を進めるうえで重要な同盟者として位置づけられ、1940 年代には「自由資産階級」という言葉も使われ、彼らの革命への動員が計られる。それと同時に、共産党はその独自性を統制しようとし続けた<sup>3</sup>。1950 年の朝鮮戦争開始以後は、急速に従来以上に統制の対象となってゆくのである<sup>4</sup>。1956 年の社会主義改造の完成は、経済的階級としての民族資産階級の消滅を意味したが、彼らに対する統制は続き、翌 57 年の反右派闘争で 1 つの到達点を迎えた<sup>5</sup>。1966 年からのプロレタリア文化大革命（文革）では、周知のように共産党内外の資本主義的な傾向をもつとみなされたグループ（「走資派」）へのさらに激しい弾圧が行われ、民族資産階級とされた人びとも大きな被害を受けた。

今日の中国では、「社会主義初級段階」や「社会主義市場経済」が論じられ、実質的には資本主義経済の発展が目指されている。それゆえなのか、民族資産階級の歴史的ありようについても、改めて着目された<sup>6</sup>。ただし民族資産階

級の評価をめぐることは、民建などの検討を通じて、1957年までなんとか独自性を保とうとしてきたことを評価した筆者とは異なる見解もある。たとえばすでに20年近く前に楊奎松は、社会主義改造に民間の側からの抵抗がほとんどなかったことを例にあげながら、1952年からの五反運動を通じて、民族資産階級の独自性・自律性はほとんどなくなったとみなしている<sup>7</sup>。

とはいえ、この点については、中国の学界でも定説を得たとは言えない面がある。そこで本稿では近年の中国における社会主義改造研究などの成果を学びつつ、改めて中華人民共和国のもとでの民族資産階級のありようについて、孫鼎（1908～1977）という個人に焦点を当て、彼の個人史に即して具体的に検討したい。

というのは、筆者は1957年まで中国大陆においても、リベラルな思想潮流が存続したと考えており、その担い手である民族資本家のありようを中国の現実の政治のなかで考える必要があると考えているためである<sup>8</sup>。本稿では文革前夜までを視野に入れて分析を行うための基礎作業をおこなう<sup>9</sup>。

## 1. 孫鼎について

孫鼎については考古文物の収集家として話題になることはあっても、これまで政治史研究の対象とされることはなく、政治的には突出した人物ではない。しかし、以下で紹介するように、上海の多くの民族資産階級の実像を示す1つの例になると筆者は考えている。以下、行論の必要に応じて、彼の経歴と彼が生きた政治環境について、ごく簡単に素描しておきたい。

1908年生まれの子孫鼎は安徽省桐城県人、3才の年に母を、11歳の年に父を亡くし、母方のおじ・周叔弢の支援を受けた。周は文革後に中国共産党によって「民族工商業界の代表人物」と評価され、鄧小平が1979年1月に改革開放政策を本格化させるための座談会、俗に言う「五老火鍋宴」に招聘した5人のうちの1人となった。ちなみに周以外は榮毅仁、胡厥文、胡子昂、古耕虞であり、いずれも共産党と親和的な民国期以来の企業家であり、周自身も中華人民共和国で天津市副市長となっている。また周一族には清末の洋務派で両江総督・両江総督に任じた周馥や、学界や実業界で活躍した周学海・周学熙がいる<sup>10</sup>。

孫鼎は新文化運動が深化してゆく 1921 年に天津の南開中学に入学し、26 年に上海の交通大学電機工程系に進学して 30 年に卒業した。孫鼎は 1924～28 年の国民革命の混乱のなかで人格形成を遂げた世代の 1 人であり、交通大学を卒業した後、上海で就職した。孫鼎は留学こそせず、また卒業後も実業界で活動したが、雷海宗や費孝通らと同世代の知識人で、当時の最高レベルの高等教育を受けている。

日中両国の対立が深まるなか、孫鼎は技術者として社会生活をはじめ、日本占領下も上海にとどまった。民国時代の孫鼎は投資活動を行うなど資本家としての才覚を発揮しているが、彼は技術者としての立場を堅持したという。ともすれば、投機的な投資へ走る有産者の存在が問題視される中国において、彼は「東方のジューゼン」になるとの野心を胸に、中国の電気機器産業の発展を目指した<sup>11</sup>。戦後は 1946 年 7 月に上海で開業した周家の企業である新安電機廠の社長（総経理）となり、1947 年には中国初の 40 馬力の変速モーターを作り上げた。1949 年 6 月には天津に新安電機廠の分廠を設立するうえで重要な役割を果たしたと言われる。

中華人民共和国成立以後も孫鼎は大陸に留まり、新安電機廠は 1956 年の社会主義改造運動に先立って 1953 年に公私合営に踏み切った 14 の企業のうちの 1 つとなった。孫鼎は上海の民族資本家のなかではいち早く改造を受け入れた人物となったのである（後述）。公私合営後の新安電機廠は 1954 年には、700 人の労働者を雇用し<sup>12</sup>、1956 年には千人近い労働者を擁し、大企業の一つとなっていた<sup>13</sup>。孫鼎は企業家としては 1956 年まで上海公私合営新安電機廠社長兼技術長、そして第 1 副工場長を歴任し、その後は上海市施転電機製造公司副経理となっている。なお施転電機公司是、この年の 2 月に上海市機電位置局が設立した会社で、その設立を機に上海市政府は電機工場 の調整、合併、改組を開始し分業を進めた。新安電機廠は、1959 年 3 月に益中電機廠、華成電機廠と合併して上海先鋒電機廠となった<sup>14</sup>。

こうした経歴もあってか 1950 年代のはじめから孫鼎は、抗美援朝行動委員会常務委員として積極的に政府に協力し<sup>15</sup>、1957 年の反右派の前後を通じて政治的立場は「左」（民建、中国工商業聯合会（工商聯、後述）のメンバー）

とされている<sup>16</sup>。また上海市の政治協商会議委員、さらには全国人民代表大会委員と全国政治協商会議委員などを歴任している。

また孫鼎は愛国者として振る舞おうとしたようで、日中戦争期にはかなりの金額を支払って北宋最後の通貨・「靖康通宝」を手に入れたが、それは転売や贈答が目的ではなかった。孫鼎は北宋の岳飛や南宋の文天祥、そして明の史可法が、「靖康通宝」を身につけていた故事にならって、臥薪嘗胆の戒めとしたのである。周知のように岳飛・文天祥・史可法は愛国者としてたたえられている<sup>17</sup>。さらに 1960 年 2 月には、孫鼎は自身の収蔵物を国家に献納し文化部から報奨されている<sup>18</sup>。

先述したように、孫鼎は現実の政治過程において特段目立つ存在ではなく、従来の政治史・政治思想史研究でもほとんど触れられてこなかった。だが、如上のように孫鼎は共産党の統治を受け入れた愛国的な民族資産階級の一人であり、ケーススタディとして取り上げる価値はあると筆者は考えている。

## 2. 孫鼎と新安電機廠の社会主義改造：1949～1955 年

周知のように清末に成立した「商会」には工業経営に従事する者も含まれていたが、20 世紀を通じて進められた中国の経済発展は、「商会」から「工業会」を分離する要求を高め、1948 年に上海市工業会が成立した。1949 年 5 月に上海の占領を始めた共産党にとって、都市機能の維持と経済の安定のために、商会と工業会にいかに対応するかが課題となった<sup>19</sup>。

この課題に応えるために、共産党が利用したのが前述の民建であり、それを通じて上海市工商業連合会（工商聯）を組織した。具体的には 1949 年 8 月の上海市人民代表大会において、盛丕華や胡厥文など共産党を支持する民建の資本家が工商聯の組織を提案し、その組織化を進めたのである。1949 年末に商会と工業会は工商聯に接収された。

中華人民共和国成立前の 1945 年の共産党の第 7 回全国代表大会で、毛沢東は「資本主義の拡大発展が必要であり」、さまざまな問題も生産力の発展という「共同要求」のうえで「調整すること」ができると指摘した<sup>20</sup>。この方針は 1949 年 3 月に石家荘で開かれた第 7 期 2 中全会で確定した。すなわち中国の経済的な後進性が自覚され、共産党は民間資本の積極性を十分に活用す

ることを強調し、その方針は中華人民共和国の最初の憲法に相当するといわれる、人民政治協商会議の『共同綱領』に結実することになる。そこでは私的資本の経済活動を保証するとともに、その発展の重要性が強調されている。

朝鮮戦争がはじまり経済統制が強められるなか、中国では社会主義改造が展望されるとともに、資本家に対する抑圧が本格化する<sup>21</sup>。たとえば公債の強制的な割り当て購入が行われ、また税金の取り立てなども厳しかった。本稿で扱う上海では1950年3月に増税が行われ、予定額の106パーセントが集められたという。その結果、負担の重さに経営に行き詰まる商工業者が出てくるありさまだったが、上海市の財政委員会副主任で財政局長・税務局長を兼任していた顧准は、「資本家を潰しても問題はない。遅かれ早かれ我々はこれらの企業を接収するのだ」と発言したという<sup>22</sup>。しかしこうした政策は経済的な合理性に欠けており、上海市長の陳毅は上海の商工業者の経営を維持させることのできる実際的な緩和策を求め<sup>23</sup>、毛沢東も当時の政策は妥当ではなく間違っていたと評価するに至ったという<sup>24</sup>。

1951年に入ると抗米援朝のための募金活動が展開され、上海の資本家も戦闘機270機分の資金を提供した。こうしたナショナリズムの高揚による経済的な負担もまた膨大なものになった。だが、1952年になると状況はさらに厳しくなる。五反運動である。それは「五毒」（①賄賂、②脱税、③国家財産の窃盗、④仕事の手抜きと原料の誤魔化し、⑤国家の経済情報の漏洩）の摘発運動である。

「五反運動」では大衆動員がなされ、労働者が自らを雇用する経営者を糾弾する事態も数多く引き起こされた。大衆集会での私刑や取り調べの屈辱のなかで、自死するものも少なくなかった。香港中文大学が所蔵する共産党の幹部用資料である『内部参考』によれば、1952年1月25日から3月25日の2ヶ月間に、上海で三反五反によって自死したのは466名、そのなかの33名は高級職員、その他は経営者だったという<sup>25</sup>。

民建は1949年以後、民族資産階級と共産党との橋渡しを求められていたが、指導的幹部の1人であった施復亮が、1952年段階で自己批判を行い、民族資産階級の存在意義を自己否定し、労働者になることを求めた。こうした動きに対して毛沢東は、民族資産階級は民族資産階級でしかなく、その積極

的な意義は共産党も認めてきたし、今後も彼らを支持するべきだと述べた。また毛沢東は施復亮と直接会って励まし、施を多いに感動させた。また民族資産階級の長老格であった黄炎培にも、資本家が利益を追求することは国家のためになり、あなた方がマルクス・レーニン主義だけを語る必要なく、一般の人々に共同綱領を学ぶよう勧めることが肝要だと述べた。黄炎培と民建はそれによって安心したと言われる<sup>26</sup>。

毛沢東は「五反運動」の行き過ぎによって、民族資産階級の「主体性」を損なうことを批判したのだといえよう。龐松によれば、この毛沢東の発言は、「五反運動」が一段落した 1952 年 6 月のものだという。たしかに同時期の中共統一戦線工作部の第 3 次統一戦線工作会議でも、左翼の「いらいらとしたぶっきらぼうな方法」が批判され<sup>27</sup>、「民主人士」が思想改造のための「整風運動」に参加するか否かは、彼らの自主的な判断に委ねることが強調された。彼らは共産党とは階級的に異なった思想と立場にあり、「プロレタリアートの思想をものさしとして彼らに要求すべきではない」とされたのである<sup>28</sup>。

だが中共中央統一戦線部の部長だった李維漢の回想によると、毛沢東はこの会議で発表された「關於民主党派工作的決定」の草稿にあった民族資産階級を中間階級とするという規定を誤りだとして、「中国内部の主要矛盾はすなわち労働者階級と民族資産階級の矛盾であり、それゆえに民族資産階級を中間階級と呼ぶべきではない」と指摘している<sup>29</sup>。それが顧准や薄一波が、「公私は一律平等に納税する」と主張して、右傾——民族資産階級の“優遇”という誤りを犯したと共産党内で批判される根拠となった。1952 年 6 月段階の毛沢東は民族資産階級が存在を「主要矛盾」としたうえで、行き過ぎの是正を計ったにすぎなかった。

五反運動は、民族資本家の経済活動を大きく阻害し、その後、共産党も政策に調整を加えたが、「“五反”後の公私合営の歩みは大いに早まった。これは政府にとって一大収穫であった」<sup>30</sup>。具体的にいえば、五反運動における追加の徴税、資材などの国家所有への変更、罰金などが資金となって、公私合営を促進することになったのである。

この「五反運動」の過程で孫鼎も審査の対象とされ、7 度にわたる自己点検の報告書がある。そこでは盲目的な経営により浪費をしたこと、暴利思想

があったことが彼の「罪」として指摘され<sup>31</sup>、罰金をとられている<sup>32</sup>。それが本当に犯罪的な行為に手をそめたがゆえなのか、あるいは上海の大企業であるがゆえに、共産党によりさまざまな理由をつけて財産の一部が接収された結果なのか判然としない。だが、孫鼎が「五反運動」において、政治的にも経済的にもダメージを受けたことは間違いない。

また孫鼎が設立した新安電機廠も、上海でもっとも早く 1953 年に公私合営化された 14 の企業の 1 つとなった。上海市檔案館所蔵史料により、この過程を詳細に検討した張忠民によれば、その過程は大要以下の通りである<sup>33</sup>。

上海では 1953 年の春に公私合営を前提として調査が行われ、以下の 17 企業が試験的に公私合営化の候補と定められた。新安電機廠は、「五反の債務」が全資産の 95 パーセント以上の 115 億元であったがゆえに、公私合営に移行しやすいと判断された<sup>34</sup>。

**表 上海における公私合営試行 17 企業案**

業種	数	【業種】：企業名
軽工業	5	【紡織】：恒大・新裕、【紡績】：統益・崇信、【染色】：鼎新
重化学工業	12	【ゴム】：正泰・中南、【製紙】：江南・大秦、【琺瑯】：順風 【冷蔵】：茂昌、【電機】：新安電機廠、華成電器廠、【鉄】：大同鉄工廠、中華鉄工廠、【機械・発動機】：上海機器廠、鄭興泰汽車機械製造廠、中国柴油機公司

出典：前掲 張忠民「1953 年上海十四家私営工業企業拡張“公私合営”研究」135 頁。

最終的に共産党中央は、公私合営に適さないと考えた中国柴油機公司と鄭興泰汽車機械製造廠の 2 つの企業を除いた。そして中華鉄工廠については、国家にとって重要だが、その主たる株主は「高級民主人士」であり、合営は彼らの自主的な申し出を待つべきだとした。孫鼎の新安はそうした配慮の対象とはならず、最初の公私合営の試行企業となったのである。



1953年6月に始まった全国財經工作会議を経て、同年9月に中共中央財經委員会のもとに設立された第6辦公室が全国の公私合営化を進めることとなった。それは1953年10月に國務院の第8辦公室に組織替えされ、責任者は中共統一戰線部長の李維漢だった。李維漢の指導のもと、全面的な公私合営の経験の蓄積のために、全国の公私合営化に先立ち上海での試験的な改造が取り組まれ、1954年9月に一応完成した。

この過程で問題となったのは、もともとの経営者であった民族資本家の合営後の地位と、企業の資産の査定であった。前者について新安電機廠では、孫鼎を副工場長とし、後者については、他の企業に先立ち1954年3月から、統益紗廠、江南造紙廠とともに査定が始まった。その困難で複雑な査定の過程のなかで、新安電機廠の株主の貸出金3億6,300万元が合営企業の資本金に転用されることとなった。また先に紹介した五反のときの「債務」は、そのまま政府の持ち株となった<sup>35</sup>。

一方で孫鼎のモーター設計能力は業界内のトップクラスであり、経営管理能力も大変に高く、孫は総経理と総工程師を兼任していた。孫鼎1人の力で新安電機廠の業績は、1949年以後数倍になり、1954年にはすでに1,800名を超える大工場となっていた。その力量を共産党も認めざるを得ない<sup>36</sup>。1956年6月段階で、孫鼎の職場の共産党幹部は、彼の技術を高く評価したうえで、「総路線の公布後、まず公私合営をおこない、資産家の企業の改造に率先して手本を示す役割を果たした」として、孫の「民衆基礎と代表性」を労働者が「一致して擁護」したと評価している<sup>37</sup>。

それゆえ孫鼎は政治的な地位も与えられ、上海市の政治協商會議の委員となり、電機機材がソ連や東欧諸国からの輸入にたよっていることを問題視し、合理的でない生産や経営の改造を目指す<sup>38</sup>。さらに1955年の上海市の第1期第3回人民代表大会では、「当時の私の思想のなかには、嚴重な自己卑下の心理があり、過去の一切を消極的に否定し、政府方の指導を完全に受動的に受け入れていた」が、労働者たちの熱心さと自分の自己卑下に矛盾を感じ、包み隠さず公方代表に告白をすると成果が現れた、という成功物語を述べている<sup>39</sup>。さらに同じ大会で上海の他の企業に先立って公私合営に踏み切った民

族資産階級の1人として、次のように発言し社会主義改造への道を開こうとしている<sup>40</sup>。

今日、改造によって資本主義の経営思想を私営企業から徹底して取り除かないと、私営企業が社会主義建設のために勤めることを希望しても、虎にその皮を求めるようなもの、狂人の寝言のようなものである。……

総じていえば、私営商工業者が改造を受け入れることは、長期にわたる困難な自分自身との闘いであり、「主動」と「被動」との間の思想の反復闘争であり、私たちは自覚し自ら望んでこそ、やっと自己の前途を明瞭に見ることができ、自己の運命を掌握することができる。

### 3. 社会主義改造以後の孫鼎と共産党

#### (1) 双百から反右派闘争：1956～1957年

1956年1月の全国的な社会主義改造の後に、新安電機廠は永誥興電器廠など23の工場を編入しさらに規模を拡大した。1956年1月に孫鼎は個人出資の資本に対する固定利息を全て放棄し、天津新安電機廠も、国有の持ち株会社となった<sup>41</sup>。

しかし、その急速な社会主義改造に対する反発もあり、第1次5か年計画の成長スピードは減速した。こうしてソ連におけるスターリン批判とその後の「自由化」の影響もあり、1956年5月に「百花齊放・百家争鳴」（双百）が呼び掛けられる。こうした状況に応じて、同年7月に開かれた「上海市工商界上層分子座談会」で、次のような状況が「民族資本家」の側から明らかにされた<sup>42</sup>。

- ① 政府側が階級区分の境目を強調し、たとえば技術を持っていても、資本家の係属だとして他の部門へ配置転換されたり、ソ連の工業展覧会で、資本家側に質問した労働者が批判されたりした。
- ② 上海第6鋼廠の車懸章によれば、政府と資本家側とが表面的な関係でしかなく、企業内部は制度的に混乱している。
- ③ 政府側が情報を公開せず、決定後、資本家側が政府側に問題があることを知ることになる。

- ④ 資本家側の職場の権利に対する政府側の支援が充分ではなく、労働者の尊重を得ることができない。資本家側が労働者に仕事を早くするように言うと、逆に恫喝された。政府側はこのとき工場内にいたが、ただ冷ややかにながめるだけで、なにもしなかった。
- ⑤ 政府側がすべてを取り仕切り、公私の区別ははっきりせず、あるいは区別があっても、それが実体化することはない。
- ⑥ 政府側は資本家側の技術の才能を信じず、試作品の製作を支持しない。
- ⑦ 少数の政府側の代表は厳重な自己本位の誤りを犯し、資本家側の意見を重視せず、生産に損失を与えている。

この座談会では仕事を分け責任を負い、集団的な指導精神を貫徹するというやり方は、「古い合営企業のうち新安電機廠などでは、すでに何年も実行しており、顕著な成果をあげている」とされている<sup>43</sup>。

上海市檔案館の所蔵史料では、孫鼎がおかれた 1957 年の政治的な状況は分かり難いが、先に紹介したように、1958 年 1 月には政治的立場（「政治排隊」）は反右派闘争前は、「左」（工商聯）であり、現在も「左」（「工商聯排隊」）との評価がなされている<sup>44</sup>。『人民日報』などの報道からも彼が右派分子として名指しして批判された形跡は見られない。

## （2）大躍進から調整期へ：1958～1963 年

1956 年 9 月に社会主義改造の一応の完成を踏まえて開いた第 8 回全国代表大会の政治報告についての決議で、共産党は階級間の矛盾は基本的に解決し、「社会主義の政治制度がすでに打ち立てられたいま、主要矛盾は先進的な社会主義制度と遅れた社会生産力間の矛盾である」とした<sup>45</sup>。こうした立場が、双百を呼びける理論的な前提となっていたといえよう。

だが、猛烈な共産党批判の前に、毛沢東は 1957 年 6 月以降、言論弾圧に踏み切る。反右派闘争である。それは共産党内外の言論の自由を奪うことを意味し、その結果、共産党内の誤った政策に対する有効な批判が機能できないことになった。さらに 1958 年 5 月に共産党が、第 8 回大会第 2 回会議という変則的な会議を開催し、社会主義改造が完成したという第 8 回大会の認識を変更し、「社会主義がうち立てられるまでは、プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争、社会主義の道と資本主義の道との闘争が終わりが国内部

の主な矛盾」だとして、「多く、早く、立派に、むだなく社会主義を建設せよ」と呼びかけることによって、共産党の極左化の誤りは加速された<sup>46</sup>。すなわち1959年に毛沢東は、15年で英国に追いつき追い越すという、客観的な条件を欠いた無謀な生産拡大政策（大躍進）を提起したが、当時の中国ではそれをとどめることができなくなっていたのである。

孫鼎も1959年の「先進生産者」の代表大会では、次のように右傾への批判を前提として大躍進を進める立場から議論を行っている<sup>47</sup>。

この民衆大会は、大躍進以来の輝かしい成果を点検するだけでなく、……重要なのはこの大会を通じて、全国の生産を進め、大躍進の基礎のうえに、より一層の躍進を惹起することである。さらにこの大会を通じて鉄の事実をもって、あの右傾機会主義者に対して情け容赦ない打撃を加え、我々が前進する道を邪魔するものを取り除くのである。

だが周知のようにこの大躍進は、地方幹部の誇大報告に基づく農村からの糧食の大量収奪と、旧式で低レベルの製鉄の強行などに伴う都市部を含む過重労働により、3,000万人ともいわれる人口減が生じる大惨事となった。この混乱を改善するために、1960年から資本主義的な競争原理を一部復活させた調整政策が、劉少奇らを中心として進められる。また大躍進の失敗は、毛沢東の権力と権威に一定のダメージを与えたことは否定できない。

大躍進政策の誤りがはっきりするに従い、共産党内部での内部対立が深まった。それは中ソ対立の激化など国際的な緊張とも相まって複雑な様相を示し、1959年7月から始まった廬山会議での彭徳懐の毛沢東への意見提出は、毛沢東の過剰ともいえる危機感を呼び起こし、1959年8月に「關於反対右傾思想的指示」が出された<sup>48</sup>。共産党の第8期第8回中央執行委員会では、彭徳懐らを「ブルジョワ民主主義者」の「党内の同盟者」とみなし「反党集団」として、厳しく批判するにいたった<sup>49</sup>。

だが大躍進政策の誤りは明らかであり、秋には政策が転換される。王永魁によれば、同年11月に統一戦線部が共産党中央に宛てた文件は、次のように指摘したという<sup>50</sup>。

各民主党派、資産資本家、旧社会の知識人の中では、大鳴、大放、大字報、大弁論などの大衆的な闘争〔批判される人物に対して、大衆が集会において対面で厳しく批判し、その人物の政治的・思想的誤りを壁新聞などで示すことをいい、「大民主」ということもある。実際の闘争の場では凄惨な暴力が批判される人物に加えられることも多かった〕を採用せず、「反右傾闘争」や重点的批判、そして思想告白運動〔「交心運動」〕は行わない。

共産党中央はこの文件を下部に伝達する際のコメントにおいて、この立場が毛沢東によって認められていること、そして運動をやっているところは適当な方法で運動を終結させなければならないとしている。

こうして 1960 年に入ると、共産党の民族資産階級に対する対応も緩和されたと言われる。それは前述の王によれば 1960 年の 2 度にわたる「神仙会」の開催に現れている。この「神仙会」とは、民族資産階級に暴力を加え、弱みを握り、レッテル貼りをすることを止めて（「不三」、共産党の指導を前提としてではあるが、民族資産階級が自ら問題を出し、分析し、解決するという「三自」を実行し、彼らの主体性をひきだそうというものであった。

この立場は、劉少奇の考えをもとに発表されたという、1960 年 3 月 1 日付『人民日報』の社論「工商業者応当下決心“顧一頭”、“一边倒”」で提示され、民族資産階級に受け入れられたという。同時に思想界においても従来の締め付けが緩んだ時期ととらえられる<sup>51</sup>。だが双百の時期とは異なり、当然、原則はある。胡厥文は 1960 年の上海市の人民代表大会で次のように発言する<sup>52</sup>。

〔われわれ工商業者は〕積極的に目前の技術革新・技術革命運動に身を投じ、虚心に労働者大衆に学び、満腔の情熱をもって土法〔民間在来の方法〕に学び、迷信を打破し、大衆を信じ、身を労働人民の中に置き、労働人民とともに党の指導下、社会主義の建設事業に貢献し、資産階級

の世界観を改変する努力をし、自らを一歩ずつ名実ともに労働者に改造してゆくのである。

ここでのキーワードは「世界観」であり、おそらくこれは李維漢が『人民日報』で毛沢東の理論を紹介した論文と呼応している<sup>53</sup>。やや長くなるが、以下の議論の前提となるので、詳しく見ておきたい。この李維漢論文は、王が神仙会の例としてあげる1960年夏の小党派の大会で示されたものだった。

李維漢はまず民族資産階級の「経済上の改造は比較的容易であり、本当に困難なのは人の改造、すなわち政治上・思想上の改造である」と述べ、内心におけるブルジョワ的な傾向を否定し、社会主義的な主体の形成を求める。そのためには厳しい闘争が必要であるとして、次のように指摘する。

古い修正主義者は「一般民主」を言い、現代の修正主義者は「人道主義」をいう。彼等はみな敵に対する鎮圧を語らず、無産階級革命と無産階級専政の学説に齒向かっている。我々は修正主義との境目をはっきりとしなければならない。

さらに李は、「中国の革命の経験は、資産階級と統一戦線を結成する時、右傾機会主義あるいは修正主義が主要な危険となることを証明している」として、左傾の誤りを事実上黙認する。そして資産階級はその階級の本質を免かれることはできず、「各民主党派はこの革命のなかで、資産階級の消極的、反動的な一面を反映しないことはありえず、厳重な闘争と苦しい改造の過程を経る必要がある」。

いわば出身が思想・行動の全てを決定するという議論で、ここまで来ると文革の論理とほぼ大差ないものになっている。その点で王のように神仙会を高く評価する議論に、筆者はくみすることはできない。反右派闘争以来の政策の行き過ぎに対して、民族資産階級に対する暴力的な抑圧を当面の間加えない、という調整に過ぎないだろう。

しかし、調整期はやはり調整期であって、ある種の思想的な自由は生まれていたといえ、孫鼎は上海の民建と工商聯の中央代表会議で次のように発言

している<sup>54</sup>。反右派と大躍進を経て閉塞している状況を打破する試みとは言えるのではないか。

通常の制度によって解決すべき問題のように、主要には一定の会議制度を築き、資本家側が指導と任務の配置の精神をさらによく理解することができるようにし、あわせて言いたいことを述べ、意見を提出できるようにしなければならない。こうして教えを受け入れ、積極的な作用を発揮できるのである。

さらに上海の大学卒業生を内地に送ってきたことへの不満を示したり、技術面に即して、共産党が決めた1961年9月の「国営工業企業工作条例（草案）」の不十分さを指摘したりして、次のように調整期を「技術的な基礎を打ち立てる絶好の機会だ」と強調している<sup>55</sup>。

[小型モーターなどの生産における]多くの基本問題が明らかになっていない。つまり目前の質の問題を解決する必要があり、…… [共産党の方針を貫徹する以外の重要な任務とは]工業系統の科学的な工作を強化しさらに技術水準を高めることである。なぜなら、これらの生産過程の技術問題というものは、純粋な科学研究系統のなかで1つの単位にまとめられないからである。

なお孫鼎の生活レベルは、1960年4月25日の段階では、月給が950元、利息収入が毎年約3,000元。利息はすでに放棄したとされるが、扶養家族は4人で、毎月の固定支出が約600元。その他の親族の養育などに毎年約200元。公職として、全国政協委員、上海市人民代表、民建中央委員、上海市工商聯常務委員、電機局基金小組責任者があがっている。また文化部から文物の寄付で表彰もされている<sup>56</sup>。当時の孫鼎の生活は、反右派闘争やその後の大躍進政策の荒波にもまれながらも、相応に安定していたといえよう。

### (3) 1964年の孫鼎批判とその意味

1962年あたりから、民建と工商聯との連携が強く求められるようになるが、1963年11月に開かれた連席常任委員会拡大会議で、孫鼎は「多数と少数、主観と客観についての認識」と題する発言をすることになる。そこでは会議のなかで考えが深化したとして、「右派は適当な気候と土壌のもとで現れる」ことを強調する。

孫鼎によれば、少数であるにしても、なぜ右派が生まれるようになるのかを考える必要がある。その要因には国外のものもあるが、国内の「気候と土壌」という要因が大きく、労働者階級や共産党がそれを作り出すはずはなく、資産階級が作り出している。章乃器や李康年たちという悔い改めない右派＝「敢死隊」の出現は、偶然ではなく多人数の声援・援助がなければ出現できないのである<sup>57</sup>。さらに大躍進を高く評価する発言もなされ、孫鼎はもともと大躍進を批判するために1960年に提起された「調整、強化、充実、向上」の「八字方針」を、1963年には「大躍進の発展であり、否定の否定である」として、「弁証法的」に擁護するに至った<sup>58</sup>。

1964年になると民建・工商聯の幹部である胡厥文に対する批判が本格化し、その動きは民建・工商聯内部での自己批判を拡大してゆく。孫鼎もこの過程で自己批判を迫られたが、まず1964年9月の胡厥文の自己検査の要点を確認しておきたい。胡厥文の発言で興味深いのは、「二を合わせて一とすること」を論じた楊献珍の哲学論への康生による批判を自己批判の論拠としていることである。この批判は康生が文革を推進する理論武装のために行ったと言われ、楊献珍の議論は労資の本質的な敵対関係を調和し闘争を否定して、毛沢東に敵対するものだという強引なものだった。

胡厥文は次のように述べている<sup>59</sup>。

ただ良い人、悪い人がいるだけで、階級を抹殺していた<sup>60</sup>。……[私は]これらの観点を提出し、実際には「二を合わせて一とすること」[の理論]と資産階級の人性論とで階級を否定し、資産階級分子の本質の改造を否定した。



胡厥文は康生の楊献珍への批判を受け入れる形で自己批判を迫られたのである。そして「地主の中の「よい人」も結局は地主であることを、資本家のなかの「よい人」も畢竟やはり資本家であることを〔私は〕見なかった」と総括する<sup>61</sup>。この論理を突き詰めると、どんなに改造を経ても、どんなに共産党の要求にこたえても、資本家出身の人間はいつまでたってもその出身に縛られ、終わることのない自己批判を迫られることになる。

この胡の自己批判を聞いた民建と工商聯の幹部は、同様の対応を迫られ、次のように述べるに至る。

錢葆蓀の工作會議交流会上の發言稿（1964年11月9日）<sup>62</sup>。

この工作會議上で、老厥〔胡厥文〕が行った「我々自身の消極的で反動的なこれらのものは和平演變〔平和的な手段により社会主義体制を崩潰させ、資本主義体制を復活する変革〕を導く禍根である」との話聞いて震動した。階級の本質というものを認識した。

王鴻文は1964年11月9日午後の發言稿（定稿）で、当初、「和平演變」とは、糖衣砲弾を用いて労働者を腐敗させ、幹部を腐敗させ、指導権を篡奪することだと理解していたが、少し前まで共産党が推進していた「三和一少<sup>63</sup>、三自一包<sup>64</sup>」の政策こそ、「和平演變」だと発言し、次のように主張する。

強大な無産階級の専政のもとにあり、資本主義は客観条件の抑制を受けており、あえて望むところを行うことはない。しかし私たちのこの反動的本質は決してこれにより喪失はしないし、それは適当な気候条件〔政治などの条件の比喩〕だと考えれば、……頑強にあらわれてきて、客観世界を変革しようと企図する。

ここからうかがえるのは、当時の共産党が民族資産階級の離叛によって、中国の社会主義が内側から瓦解することを極めて強く恐れていたことであろう。

孫鼎の1964年11月9日午後の発言の要は次の通りである<sup>65</sup>。1962年の中央執行委員会が開催されたとき、私の思想は大躍進と抵触すると考え、当時も自己批判を行い、それは組織的にも認められたと考えてきた。自分の問題は、「ふとした考え」と「つい口をついてでる」言葉の誤りだけだと考えていた。だが、「ふとした考え」や「つい口をついてでる」言葉に示される共産党に対する批判には、強烈な対抗意識があり、「我々資産階級のもっとも本質的で、もっとも反動的なものであり、決して部屋のなかに閉じ込め、自己の「理知」で克服することができるものではない。

こうして個々人の「個性」が育まれ、保護されるべき私的領域（「小天地」）は、「自留地」として自己批判の対象とされ、完全に否定される。続いて12月14日午後には「孫鼎批判大会」が開かれ、胡厥文が孫を批判する講演を行い、次のように述べた<sup>66</sup>。

思想は必然的に行動に発展する。……孫鼎同志は近年来の工商界の政治思想の大反復のなかで、問題が多く、性質が嚴重である。……

いわゆる「狭い個人の生活範囲」（「小天地」）を叫ぶのは、資産階級の反動の堡壘を堅牢にすることであり、まぎれもなく目前の階級闘争の新しい情勢ではないのか。……

改造と聞けば恐れ、改造を嫌い、服務によって改造に替え、はなはだしくは改造に抵触し、拒み、その結果はどんなものか。工商業界は政治思想上の大反復を生み出したのである。それゆえ我々は我々の改造が1度の運動を経れば解決する、すなわち1度の検査を経れば批判は解決する、と万が一にも考えてはならない。このような考え方は、まさに我々の自己改造は「適当なところで止める」の具体的な反応であり、また改造に対する抵抗の具体的な表現である。

1965年3月に孫鼎は改めて自己批判を行う。そこには専門家としての發言さえ、「技術をもって資本のために党と力比べをし、科学技術の領域で党と指導権を争っていたのである」と言わざるを得なくなる。共産党無謬神話の極地だが、さらに孫鼎は次のようにも語っている<sup>67</sup>。

私の反動的な立場の頑強な本質は、私を引きずってゆき、私をまた消極的で対抗的な泥沼へ追いやった。……党は過ちを犯した人に対して、ただ改めることを願うだけで、歓迎しないわけではない。……自己の改造はただ圧迫された条件のもとでだけ、受け入れることが可能だということ承認することはできない。それはつまり根本的に改造の可能性がないということである。

集団的に批判され個を繰り返す否定されても、それをそのつど喜んで受入れ、党に感謝し続ける、そうしてこそ（何時終わるとも知れない）本当の改造の道に通じるという説明を、筆者は具体的な人間の行為として想像することができない。だが、こうした言説を暴力的に人びとに強いる、文革がまもなく始まってゆく。

## おわりに

孫鼎という一個人をとりあげ、1950年代から60年代までの上海の民族資産階級のおかれた状況を確認した。そこからは共産党が冷戦体制のもとで、自らが新民主主義革命論で示した「もう1つの可能性」——民族資本家の主体性を認め彼らとともに統一戦線を維持しながら、中国の民主化を徹底する可能性を否定してゆく過程が確認できた。だが、この過程は必ずしも単線的で不可逆的なものでもなかった。この点に関して羅平漢は、1962年3月の広州会議で1957年の反右派闘争により広まった知識人に対する誤った認識の是正が図られ、周恩来や鄧小平らによって右派分子と認定された知識人の名誉回復の努力が進められたことを紹介している<sup>68</sup>。

筆者の問題関心に従えば、1960年代初頭の調整政策は、たとえば孫鼎たちにもみずからの意見の発表のルートを模索させたのである。また技術者としての合理性の追求は、大躍進政策に対する批判的な対応をとらせた。この孫鼎の発言はいわば氷山の一角で、民族資産階級のなかに、共産党の政策に対する不満が蓄積されていたことも否定できまい。だからこそ、共産党は孫鼎のような立場を許すことはできず、無傷で反右派闘争を乗り越えた彼の内心

の自由さえ自己否定させるほどの批判を求めたのであろう。その共産党の論理とは、1964年秋の段階でおおよそ次のようにまとめることができよう。

民族資産階級は、生産手段を放棄し、さまざまな自己批判を繰り返しても、階級的な本質を改造することはできない。たしかに改造のゴールとして労働者となることが想定されるが、資産階級が自己批判は終わったと思い、労働者と同じ立場になったかのような態度をとることは、労働者階級と共産党をごまかそうとする偽りの姿である。したがって共産党が認めるまで改造は続く。

先に紹介したように、毛沢東は1952年に施復亮が自らの階級を否定して労働者になろうとしたことを、その必要はないと止めたが、この点を1964年の議論とあわせ考えると、毛沢東は資本家は生産手段を放棄しようが、生産関係における位置づけが変化しようが、資本家という「カインの印」を消し去ることできない、と考えていたといえよう。また1957年の反右派闘争で章乃器が資本家階級の二面性を「否定」と批判されたことも、当時の毛沢東・共産党の資本家理解を示すものといえよう。章乃器は1949年以後も大陸に止まり、共産党の政策に協力してきた民族資産階級には、先進的な面と落伍的な面があっても、そこには否定的な側面はない、階級の本質は変化しなくとも、個人の階級的性質は変え得るとの議論を展開した<sup>69</sup>。こうした言説は毛沢東にとっては、許しがたいものだったのである。

したがって改造は、実際には終点がなく永続する無限に続く運動となる。また運動の過程では、人道主義が批判され、右翼的・修正主義的な誤りを避ける必要性が強調されており、左傾の行き過ぎはいわば必要悪として是認されかねなかった。そして反革命に対する武力による鎮圧・武装闘争は、社会主義を守るために必須の方法として顕彰される。

こうした共産党の議論を支えていたのは、スターリン批判以後、顕在化してゆくソ連修正主義に対する批判であり、「和平演変」への恐怖であった。その結果、大躍進時期のさまざまな問題を是正するための調整政策時期の取り組みは、共産党内部で否定された。それはたとえば劉少奇が進めた自留地の活用が、前述のように「和平演変」だと批判されたことに示されている。孫

鼎のように技術者が自らの知識を生産現場に反映しようとしたことさえ、共産党と指導権を争うとみなしたのでは、経済の合理性を問う余地などない。

民族資産階級が一方向的に押し付けられ、受入れてきた改造の論理は、次の孫鼎の自己批判に典型的に表れているといえよう。民族資産階級は、ブルジョワ的であるとして「個」を喪失させられたことによって、根柢的な打撃を受けたのである。

私が大変に恋々とする最後の資本主義の狭い個人の生活範囲（「小天地」）はすでに朝に存在しても夕方には保てないありさまで、滅亡寸前であった。私は次のように考えた。1人の人間はまだなにか「個性」を持っているといえるのか？生活上まだ何か「趣味」はあるのか。これがすなわちわたしの当時の精神的な背景であった。

こうした自己批判の方法は、日中戦争時期の延安整風以来、繰り返された思想改造の方法を継承しており、より直接的には、1958年の3～7月にかけておこなわれた「交心運動」の延長にある<sup>70</sup>。この運動は右派分子と認定されたわけではない個人にも、内心における誤りを発見させ、個人史に即した個別具体的な問題として人々に告白することを求めるものだった。近年の中国の研究では、「個人主義」が individualism ではなく、egoism（利己主義）と理解され批判されてきた延安整風以来の思想情況のなか、共産党の思想改造は「小我」を越える「大我」を打ち立てる試みと理解する論者もいる<sup>71</sup>。

だが「大我」が意味することが、社会や国家、あるいは世界など外部社会との垣根をなくし、個人が「あるべき」立場を樹立してゆくことならば、個の尊厳を維持するうえでは、極めて危険な考えであろう。孫鼎の自己批判と彼が「あるべき」だと想定した個人のありようは、「大我」の完成であったかも知れないが、自己の崩壊と紙一重（あるいは同一）の精神のありようだった。

## 注

- 1 久保亨・加島潤・木越義則『統計でみる中国近現代経済史』東京大学出版会、2016年、久保亨『20世紀中国経済史論』汲古書院、2020年など。
- 2 民建中央宣伝部編『中国民主建国会簡史』民主与建設出版社、2010年など。
- 3 水羽信男「1950年代における章乃器の言論活動とその挫折：「百花斉放・百家争鳴」から「反右派闘争」へ」『史学研究』第190号、1990年、同前「1950年代における『民族資産階級』について：中国民主建国会の反右派闘争から考える」『東洋史研究』第67巻第4号、2009年（のちに水羽『中国の愛国と民主』汲古書院、2012年に加筆修正のうえ収録）など。
- 4 金子肇「組織される徴税：1950年代初期、上海の共産党と商工業者」笹川裕史編『戦時秩序に巣喰う「声」』創土社、2017年所収。なお金子には本論文を含む『近代中国の国家と商人：税政と同業秩序のダイナミクス』有志舎、2022年もある。あわせ参照されたい。
- 5 泉谷陽子『中国建国初期の政治と経済：大衆運動と社会主義体制』御茶の水書房、2007年など。
- 6 黄礼群「劉少奇与民族資本主義的社会主义改造研究」『四川民族学院学报』2011年第6期、張婷・張玉瑜「“五反”運動後上海私営企業産権的嬗変及其影響探究」『上海交通大学学报(哲学社会科学版)』2017年第6期、王宏鵬「建国前後毛沢東对資本主義的認識演變」『党史博采(下)』2018年第11期、張婷「過渡時期上海資本主義工商業的社会主义改造研究：基于馬克思主義中国化的歷史審視」上海交通大学、2019年博士論文など。
- 7 楊奎松（大沢武彦訳）「人民共和国建国前後における中国共産党のブルジョワジーに対する政策の変遷」久保亨編『1949年前後の中国』汲古書院、2006年所収。
- 8 この問題について人民代表大会との関連から考察したものとして、水羽信男「実業界と政治参加」深町英夫編『中国議会100年史』東京大学出版会、2015年所収、同前「中国社会と選挙」中村元哉編『憲政から見た現代中国』東京大学出版会、2018年所収がある。

- 9 近年では筆者とは問題関心を異にするが、市井の人々の日常から毛沢東時代を問い直そうとする研究も進展している（鄭浩瀾・中兼和津次編『毛沢東時代の政治運動と民衆の日常』慶應義塾大学出版会、2021年など）。また中国では感情史・精神史研究が盛んになっている。この点については、さしあたり李志毓「情感史視野与二十世紀中国革命史研究」『史学月刊』2018年4期を参照されたい。なお李論文は「“情感史研究和当代史学的新走向”筆談」と題する特集の1篇である。
- 10 蘇小小「孫鼎・熱愛收藏的電機電器実業家」『風流一代』2020年第15期。以下、特に注記しない限り、孫鼎の経歴は蘇論文による。
- 11 鄭重「孫鼎與周叔弼」『大美術』2008年第3期、88頁。
- 12 戴慶忠「電機史話」（22）上『東方電機』2009年第5期、100頁。
- 13 「上海市工商業聯合会 1956年會員代表大会代表登記表（孫鼎）」上海市檔案館館藏檔案全宗号C48、目錄号1、案卷号101-23（以下、上檔C48-1-101-23のように略称する）。
- 14 前掲、戴「電機史話」（22）上、89頁。
- 15 「上海市江寧区人民代表大会代表履歷表（孫鼎）」（1954年、上檔B52-2-109-100）。
- 16 「上海市施軫電機制造公司填報的高級知識分子調查表（孫鼎）」（1958年1月、上檔B145-2-60-35）。
- 17 丁宗琪（口述）・丁蘗（整理）「孫鼎身繫“靖康通宝”」『世紀』2014年第3期、15頁。また孫鼎は戦国時代の古代文字の史料を叔父の周進が集めた『季木藏陶』の編集に兄と関わり、1945年に公刊したといわれる。彼は古銭だけでなく、考古文物の収集・整理にも努めている（王重忱「錢幣学家孫鼎及其手書跋文」『中国錢幣』1993年第1期）。なお『季木藏匱』は、出版者不明、1943年版が東京大学東洋文化研究所に所蔵されている。孫鼎は中華人民共和国においても、高額の収入を得ながらも生活費を切り詰め文物の蒐集に努め、「もっとも「錢」を持ちながらかえって黄金のお椀を捧げて物乞いをするような人」といわれた。
- 18 この点で、孫鼎は右派分子として1957年に徹底した批判を浴びた章乃器と軌を一にしている。章乃器が寄贈した文物については、故宮博物院編『捐

献大家章乃器』紫禁城出版社、2010年がある。なお孫鼎は1966年からの文革で自宅捜査をされ、さまざまな物品を押収されているが、政府は1979年に文革での押収物の元所有者への返還措置をとる。その結果として孫家に戻ってきた文物を、孫鼎の遺族が国家に献納した（前掲、鄭「孫鼎與周叔弼」90頁）。それは文革の再来を恐れたためかも知れないが、今日では孫鼎の愛国主義が子孫まで継承された美談として語られている。

- 19 以下は李勇軍「解放初中共対上海市商会、工業会的接收」『中南民族大学学报（人文社会科学版）』2020年第6号による。
- 20 毛沢東『毛沢東在七大的報告和講演集』中央文献出版社、1995年、100、50頁。
- 21 以下は龐松「1949-1952：工商業政策的収放与工商界的境況」『中共党史研究』2009年第8期を参照した。
- 22 蘇少之、李旗明「陳毅和建国初期上海商工業的調整」『中共党史資料』第84輯、2002年、158頁。
- 23 中共中央文獻研究室編『建国以来毛沢東文稿』第1冊、中央文献出版社、1987年、286頁。
- 24 薄一波『若干重大決策与事件的回顧』（上）、中共党史出版社、1991年、165頁。
- 25 「上海五反運動開始後工商界的反応」『内部参考』1952年3月31日（前掲、龐松「1949-1952」45頁による）。
- 26 龐松「“三反”“五反”激流中的民主人士」『炎黄春秋』1998年7期。
- 27 「關於民主党派工作的決定」中共中央統戰部研究室編『歷次全国統戰工作会议概況和文献』檔案出版社、1988年、105頁。
- 28 「關於繼續加強各界民主人士思想改造的學習運動的意見」同前、120頁。
- 29 毛沢東「对「關於民主党派交錯的決定（草稿）」的批語」中共中央文獻研究室編『建国以来毛沢東文稿』第3冊、1989年、458頁。李維漢『回憶与思考』（下）中共党史資料出版社、1986年、729頁。なお張忠民「1953年上海十四家私營工業企業擴展“公私合營”研究」『社会科学』2013年第12期も参照されたい。
- 30 前掲、龐「1949-1952」49頁。



- 31 「新安電機廠孫鼎五反運動口〔一文字不明、「後」？〕思想總結(第7次坦白書)」(上檔B173-1-331-1 本史料は「新安電機廠有關孫鼎的材料」(1956年)の1つで欄外に「訂密 499号」とのメモがある。なお本文中も含め、以下〔 〕内は筆者注)。
- 32 「新安電機廠關於中央工業部、華東電業局講公方代表酌情处理孫鼎 1953年違法所得款的講示」(1954年7月11日、上檔B173-1-331-135)。本史料によると、罰金額は「新貨一万捌仟一佰另五元捌角三分正」であり、返還義務を負う「五反」で摘発された241,000元を毎年資本家の「紅利股息」で償還することも決められている。なお孫鼎が非法所得を得ていたと認定するにあたっては数度の話合いが持たれている。
- 33 以下は前掲、張「1953年上海十四家私營工業企業擴展“公私合營”研究」による。
- 34 「中共中央關於上海市年内擴大合營十七個廠的意見供華東局的復示」(1935年12月15日)李青、陳文斌、林祉成主編『中国資本主義工商業的社会主义改造』中央卷・上、1993年、486-487頁。
- 35 李ほか編『中国資本主義工商業的社会主义改造』上海卷・下、1993年、1360頁。
- 36 「上海市施轉電機工業同業公会填報的私方人員提名介紹表(孫鼎)」(上檔C48-2-1695-41)。
- 37 「上海市施轉電機工業同業公会填報的私方人員提名介紹表(孫鼎)」(上檔C48-2-1695-25)。
- 38 「孫鼎在上海政協第1屆委員會第1次全体會議上的發言稿」(1955年5月、上檔L1-1-70-72)。
- 39 「孫鼎在上海市第1屆第3次人民代表大會上的發言(列席)」(1955年、上檔C48-2-1013-154)。
- 40 「孫鼎在上海市第1屆人民代表大會第3次會議上的發言稿——關於新安電機廠企業改造結合個人改造問題」(1955年、上檔B1-1-609-5)。
- 41 戴慶忠「電機史話」(23)『東方電機』2009年第6期、107頁。

- 42 「第一重工業系統公私合營工業公私關係情况的彙報——孫鼎在上海市工商界上層分子座談會上的發言」（1956年7月、上檔C48-2-1332-111。なお孫鼎の發言を掲載した文献は上海市工商聯辦公室印發となっている）。
- 43 注36の檔案によれば、1956年の史料ではおおむね高い評価で、屈指の人材、同業のなかで威信が高いなどとされている。
- 44 注16と同じ。
- 45 毛里和子・国分良成編『原典中国現代史』第1巻（政治、上）、岩波書店、1994年、95頁。
- 46 「劉少奇、第8回党大会第2回會議での活動報告（1958年5月5日）」同前、141頁。
- 47 「孫鼎關於參加上海市先進集體和先進生產者代表大會的感想」（1959年11月、上檔C48-2-2155-1）。
- 48 「對中央關於反對右傾思想的指示稿的批語」（1959年8月7日）前掲、『建國以來毛澤東文稿』第8冊、1993年、425頁。
- 49 この決定は1981年6月の「中國共產黨中央委員會關於建國以來黨的若干歷史問題的決議」において、「完全な誤り」とされた（中共中央文獻研究室編『建國以來黨的若干歷史問題的決議注釋本（修訂）』24頁、あわせて345頁も参照のこと）。
- 50 以下の叙述は、王永魁「1960年の兩次“神仙會”」『百年潮』2015年第2期、44、46頁を参照している。
- 51 中村元哉『中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜』有志舎、2018年、特に第8章「反右派闘争から文化大革命までのリベラリズム」を参照のこと。
- 52 「胡厥文在上海市第3屆人民代表大會第3次會議上的發言材料」（1960年5月、上檔B1-1-789-43）。
- 53 李維漢「學習毛主席著作、逐步改造世界觀（1960年8月14日在中共中央統戰部為六個民主黨派的中央全會擴大會議所舉行的報告會上的講話）」『人民日報』1960年9月25日。李維漢は政治制度については、次のように述べている。「我々の人民民主獨裁は實質的には無産階級の獨裁であり、我々の國家制度は無産階級獨裁の一種の形式であり、それは資産階級の國

家の代議制と多党性と根本的に背反し、それは各社会主義国家の国家制度と原則的には同じものである。

- 54 「怎樣对待服務中存在的問題——孫鼎代表在中国民主建国会上海市委員会、上海市工商業聯合会中央代表會議上的發言」（1960年7月、上檔C48-2-2172-141）。なお「怎樣对待服務中存在的問題——孫鼎代表在中国民主建国会中央第2次全国代表大会、中華全国工商業聯合会第3届會員代表大会上的發言」（上檔C48-2-2189-19）でも、孫は同様の發言をしている。彼の發言は、全国レベルでも展開しうる価値があると当時は判断されたと思われる。
- 55 「孫鼎在上海市第4届人民代表大会第1次會議上的發言稿——關於加強工業系統科研工作的幾点意見」（1962年、上檔B1-1-850-75）。
- 56 「上海市工商業者情况填報表(孫鼎)」（上檔C48-1-175-107）。
- 57 「对多数与少数、主觀与客觀的認識——孫鼎在中国民主建国会上海市委員会、上海市工商業聯合会常委擴大會議1963年11月1日聯組討論會上的發言稿」（上檔C48-1-197-63）。
- 58 「孫鼎在上海市工商業聯合会与中国民主建国会上海市委員会執行(擴大)聯系會議上的發言摘要(1963)」（上檔C48-2-2473-24）。
- 59 「中国民主建国会上海市委員会、上海市工商業聯合会關於胡厥文等9人自我檢查的要点(1964)」（上檔C48-1-214-1）。
- 60 この箇所には「舜も人なり、我も人なり。労働者も人なり、商工業者も人なり」との挿入がある。
- 61 「胡厥文在中国民主建国会上海市委員会、上海市工商業聯合会工作會議上的回顧檢查(1964)」（上檔C48-1-230）。
- 62 「上海市工商業聯合会与中国民主建国会上海市委員会工作會議心得体会交流會議上胡厥文、孫鼎等人的發言稿和趙忍安副部長講話記錄(1964)」（上檔48-2-2715）。
- 63 「三和一少」は1962年に毛沢東が王稼祥の外交政策を批判した際の一方的なレッテルで、帝国主義、修正主義、反動派の3つの敵対的な勢力と和し、民族解放運動という味方への支援を少なくしたとの意味であった。

- 64 「三自一包」は損益の自己責任、自由市場、自留地の3つと、農民の請負制を指している。これらは大躍進政策により疲弊した農村の経済回復のために、劉少奇らが主導した調整政策を象徴するとみなされた。
- 65 「孫鼎在中国民主建国会上海市委員会、上海市工商業聯合会两会工作會議交流会上的發言」（上檔C48-2-2716-37）。
- 66 「胡厥文主任委員在批判孫鼎大会上的講話」（上檔C48-2-2788-200）。
- 67 「参加這次會議的一些感受一組孫鼎（1965年10月）」（上檔C48-2-2796-141）。
- 68 羅平漢『1958～1962年的中国知識界』中共中央党校出版社、2008年。
- 69 章乃器については、前掲、水羽『中国の愛国と民主』172-173頁などを参照のこと。
- 70 交心運動については、以下の文献を参照されたい。倪春納「交心運動的政治学分析：基于政党認同的視角」『党史研究与教学』2012年第2期、倪春納「交心運動与反右運動辨析」『中南大学学报(社会科学版)』2012年第2期、鄭琳春「一個旧知識分子的十年心路歷程：蔡致通“交心材料”剖析」『江淮文史』2015年第2期、徐遲・丁樂靜「近墨何如学近朱：从“一般整風”到交心運動：以鎮江民盟為個案的討論」『党史研究与教学』2015年第2期など。論者の立場はそれぞれだが、我々外国人が見ることの困難な史料を用いて、内心にまで迫る政治的な圧迫がいかにも人格を崩壊させるのかについて、かいまみせてくれていると筆者は考えている。
- 71 延安整風における精神史について、黄道炫「整風運動的心靈史」『近代史研究』2000年第2期は、主体的な選択として共産党と一体化し、そのことを喜びと感じる「透明な人」の存在を当時の時代状況のなかで、肯定的にとらえている。